読むミルク

メールで世界飛び回る

詩人 四方 健二

パタパタとナースの足音が駆け回り、病室の蛍光灯が点けられる。慌ただしい朝の、慌ただしい始まりだ。冷めたアルミ製の窓が開けられ、ドアが放たれた。新鮮な空気が私の頬をくすぐり、目覚めを手伝ってくれる。鏡越しに空を眺めれば、期待通りのまぶしい青空。秋の気配か、空の色が落ち着いてきているように見える。

私は毎朝、ナースにアイコンタクトで「おはよう」とあいさつする。気分がよければ、笑顔を添えて。ナースから笑顔が返ってくれば、コミュニケーションの成立だ。私にとって、なによりもうれしい瞬間である。

声を失った私は、会話という最もシンプルで、直接的なコミュニケーション手段を持たない。コミュニケーションの欠如は、そのまま孤独を作り出すことになる。心の通わない毎日は、寂寞を募らせるばかりだ。

私は、それをなによりも恐れている。

日ごろ私は、孤独に渇くことなく日々を送っている。そこには、日ごろから接する機会が多いナースの皆さんの、温かな心遣いがある。そのお陰で、私は孤独に押し潰されることなく生きていられるのかもしれない。感謝している。しかし、それだけで私の心が満たされるかといえば、残念ながらそうではない。

小さな空間の中で、私は今日も生活している。そのため、見えるものも、接する人たちも限られてしまう。それは、あまりにも寂しいことではないだろうか。私は、毎日届くEメールを楽しみにしている。目覚めると同時に、パソコンの電源を入れてもらい、テレビニュースを見ながら、メールを開いていく。それが私の朝の習慣だ。

メールには、発信者の思いはもちろんのこと、彼らの感情までもが息づいている。そこには、それぞれの個性があり、その人自身が存在していると言っても過言ではないだろう。

私にとって、メールを開くという行為は彼らと出会い、語らうことにも等しい。彼らと談笑し、時に共に悲しみ、時に怒りを共有し、お互いの思いに顔を曇らせることさえある。

私は失った声を文字にして、私の思いを返信する。メールの中での私は饒舌だ。そこには、しゃべれないというハンデはない。思うがままの言葉を、思うがままに発信できるのだ。

私は、人々との出会いを心待ちにしている。それは、誰もが求めているものだろう。たとえ寝たきりであっても、どれだけ重い障害を負っていたとしても、その思いはなんら変わることがない。

私にとって、メールを開くということは、外の世界へと続く扉を開くということだ。扉の向こうには、大きく広がる世界がある。そこには、多くの出会いがあり、絶えることのない人の輪が待っている。私は独りではないのだ。なんとありがたいことだろうか。

私にとって、メールは人々とのつながりと、自由を与えてくれる翼だ。その翼は、力強い羽ばたきで私を解き放ってくれた。

メールを駆って、私は今日も広い世界を飛び回っている。